

報告

Peer learning を主体としたサマースクールプログラム

大橋 眞 齊藤隆仁

徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

要約：多くの大学において、夏休みを利用して海外の大学生が短期間訪問するプログラム（サマースクールなど）を実施するようになってきた。多くのプログラムでは、留学生に対して、授業を提供することが主であるが、日本の大学生と同じ授業を受講させたり、交流イベントなどを取り入れることにより、日本人学生との交流の機会を図っていることが多い。それに対して、今回のサマースクールは、授業も課外活動も留学生と日本人学生の交流を中心としたプログラムという特色がある。Peer learning は、学習者同士が同じ立場に立って、お互いに学び合うことを基本としている。2 人から数人でのグループ学習や、テーマを決めて議論をすることなど、留学生と日本人学生が共に発信することが重要になってくる。また、このような共に学び合うという行為を通じて、お互いが親密になれるという長所もある。この経験により、海外留学に対するモチベーションを高める効果も期待できる。本稿では、今回のサマースクールの概要と、その効果について検証する。

(キーワード：サマースクール, Peer learning, 学生交流, 海外留学)

A Summer school program based on peer learning

Makoto OHASHI and Takahito SAITO

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

(Key words: Summer school, peer learning, cross-cultural communication of students, study abroad)

1. 背景

グローバル化する社会は、経済の仕組みだけでなく、地域社会にも大きな影響を与えることが予測されている。また、超高齢社会を迎えた日本では、これまでとは異なった時代にふさわしい社会をどのようにして築いていくのかが、大きな課題となっている。このように、これからの時代を生きるためには、今までとは違った視点から物事を冷静に見据えて、適切な行動をとることができる人材が求められていると言えよう。このような時代背景のもとに、これからの社会に求められる人材を育成するような教育改革が大学にも求められている。これらの課題を解決するためには、それぞれの課題別に対策を立てることを考えるよりも、幾つかのプログラムを組み合わせる複数の課題を解決する方策を考える方が、より効果的な場合もあり得よう。

国の枠を超えて共に学ぶという場を設けることは、学びに対する新たな気付きにつながるが多い。学問分野の縦割りが一般的な日本の大学生は、専門分野が異なる海外の大学生と共に学ぶことにより、幅広い勉学の必要性を感じる好機とな

る。この経験により、学生は新たな視点をもって次の目標を立てることの必要性を感じ取ることが出来るようになる。また、言語の壁を越えて体験的に学ぶことにより、自らの意見をもつことの重要性に気付くきっかけとなる。このようにして、あらたな挑戦の機会を作り出し、自ら目標を立てることの意義を見出すことにつながっていくと考えられる。

大学教育の学士課程構築において、教養教育の重要性が改めて指摘されているが、その実施方法や内容についても検討する必要に迫られている。多様な視点から物事を見ることが出来るように視野を広げることが、教養教育の重要な目的であろう。学際的な視点から判断することが出来るようになるためには、多様な価値観や経験を持った人々とのコミュニケーションが大きな役割を果たすと考えられる。大学におけるクラス内でのコミュニケーションは、学生の価値観が多様である上に基礎知識の不足などの問題もあり、議論の方向性や動機付けに限界がある。そのために、2008 年文科省採択の質の高い大学教育改革プログラム「地域社会人を活用した教養教育」では、地域社

会人が大学の教室において、学生、教員と共に「学びのコミュニティ」を形成して、出来る限り多様な価値観を持った人達がお互いにコミュニケーションが出来るような場面設定をすることを目指した教育改革の取り組みである^{1,2,3,4)}。また、この取組の発展系として、教室内での学びのコミュニティの構成要員として地域社会人だけではなく、海外からの留学生やインターネットのビデオ会議システムを利用した海外の大学生との会話などを採り入れていった^{5,6)}。さらに、海外の大学の学生や教員とのコミュニケーションを主体としたイベント開催^{7,8)}などのように、異文化交流をしながらお互いに学び合いが行われるような場を設定することにより、お互いに刺激し合う効果とそれを周囲に発信する効果が期待出来る。また、地域社会に残る伝統文化を生かした国際交流の取組は、自分たちの文化について、その起源にさかのぼって考え直すきっかけになるために、交流の意義も大きくなる。今回の取り組みは、このような国際交流の場を数多く設定し、これに日本人学生が参加す

ることで、様々な学びのきっかけを生み出す仕掛けになっている。本稿では、今年度の取組の概略とその成果について考察する。

2. サマースクールの取り組みについて

今回のサマースクールは、徳島大学総合科学部の主催で2012年6月20日より8月12日にかけて実施された。Peer learningをはじめとして、全学共通教育の授業（社会人参加の共創型学習及び教養科目の一部）、剣山へのエスクカーション、古民家体験型課外授業、International Student Conference などから構成されている。参加者は、部分参加を含めてアイルランド5名、中国2名、米国2名、韓国1名、日本人学生5名の合計15名であった。

2.1 Peer learning

日本人学生と留学生がペアになって、主体的に学習をすることを基本とした。日本語で話す時間と英語で話す時間を決めて会話をするやり方や、英語で日本語の教科書「みんなの日本語」を解説



図1 課外学習における Peer learning

- A. インターネットを教材とした Peer learning B. 様々な形の Peer learning が行われた「学びラウンジ」
 C. 日本人学生3と留学生1による peer learning D. International Student Conference における対話

しながら進めていくやり方などを基本としたが、ボードを使って会話をすることや、「みんなの日本語」英語版やその他の英語のテキストが使われることがあった。また、参加する人数によっては日本人学生と留学生が入ったグループ学習になる場合もあった (図 1)。

2.2 全学共通教育の授業

徳島大学全学共通教育では、社会人と学生と対話をするのでお互いに学び合うことを基本とした授業 (「学びのコミュニティ」型授業) を共創型学習及び教養科目の一部において実施している。今回のサマースクールでは、これらの授業に留学生と学び合う peer learning を実施した (図 2)。

2.3 剣山へのエスクカーション

7月14～15日に剣山へのエスクカーションを実施した。留学生6名、日本人学生5名、教員4名が参加して、剣山登山と貸別荘での宿泊体験を行った。宿泊体験では、日本人学生と留学生が共同

で調理を行いながら交流を深めた (図 3)。

2.4 古民家体験型課外授業

日本の伝統家屋から文化を体験的に知る目的で、古民家での調理体験 (7月7日、美馬市穴吹) および古民家でのヨガ講座 (8月5日、美馬市脇町) を実施した。古民家での調理体験には、留学生4名、日本人学生2名、社会人3名が参加した。また、古民家でのヨガ体験には、留学生6名、日本人学生2名、社会人1名と講師役の社会人1名が参加した (図 4)。

3. 結果と考察

3.1 留学生参加の学びのコミュニティ

教員発信型の授業のように、机上の学習だけでなく、様々な形で学習者が、能動的に他人と関わり合いながら行動することにより、教養を身につける意義を体験的に知る機会となろう。そしてこのような経験が結果として教養を身につけることに繋がっていくと考えられる。このような、能動

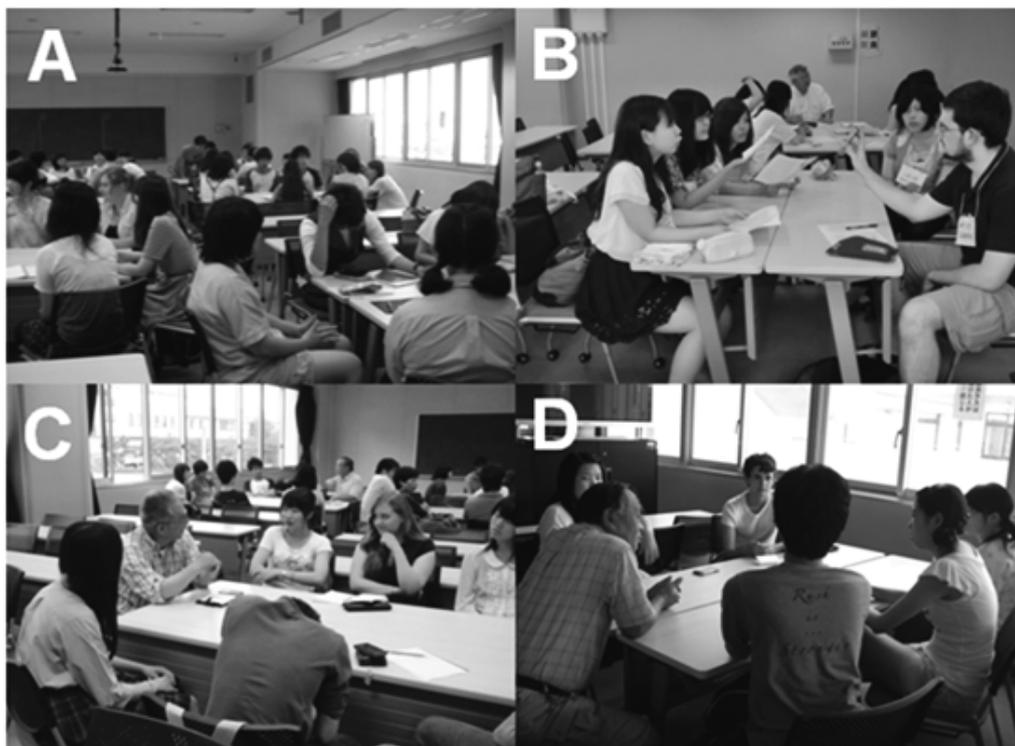


図 2 全学共通教育「学びのコミュニティ」型授業

- A. 留学生，高校生，社会人と日本人学生が一つのグループを作る授業
 B. 留学生を中心としたグループ学習 C. 社会人と留学生が入ったグループでの対話
 D. 米国，韓国，中国と社会人の加わったグループでの対話

的に他の人と関わることを基本として、同じ学びの方向性を共有しながら、お互いに学ぶ形が、学びのコミュニティである。学生が、授業に参画した留学生や地域社会人と同じテーブルを囲みながら共に議論を重ねていく。この議論は、いろいろな問題を自らの言葉で語るという能動的な関わりを実現していくことにつながっていくと考えられる。今回の取り組みの特徴は、日本人学生が同じ年代の海外の大学生と共に対話を通じて学ぶ機会を設けたことである。会話は、日本語と英語を使い分けて行うが、時にはホワイトボードなどを使いながら、図で説明することもある。このような形の学びは、授業の中にとどまらず、課外学習としても行うことで、より多くの相手と学ぶ機会を与えることができた。このような形で学ぶことは、自らが主体性に関わっていくという積極性が必要になる。これまでの勉学のスタイルが異なるために、物事に対する様々な考え方の違いがある。しかし、このような場面において積極的に関わることで、新たな発見も多くなり、このことが勉学に対する新たなモチベーションにつながっていくことが期待される。また、この取り組みの特徴として、日本人学生と世代の異なる地域社会人と様々な形で人間交流を深めることにより、日本文化を多くの視点から見つめる体験の機会を提供していることを挙げることができよう⁹⁾。また、その中に日本人学生が入ることにより、異文化を学ぶことに対する視野の広がりを持たせることにもつながっていく。このような形で、留学生は授業の内外で日本人と共に学びあう機会が設けられる。結果として、講義形式の授業において、受動的な知識の受容者になっていた日本人学生でも、留学生との対話による授業では、学びの主役へと変貌することが可能になる。このようにして、学生は自らの役割を感じ取りながら、自立した学びのスタイルを確立していく。

3.2 留学生参加の学びのコミュニティの効果

一般的な語学の授業と異なり、このコミュニティにおいては、比較的自由的な表現が許容される。このことにより、自分の考えを表現する手段としての言語の意義について、体験的に理解すること

になると考えられる。このことは、文法的な正しさよりも、むしろ相手の意見を聞きながら、自分の意見を表現することの重要性に気付くことになる(表1)。そのような過程において、人と人とのつながりをもつことの重要性に気付き、コミュニケーションの手段としての言語として、とらえることが可能になると思われる。また、コミュニケーションにより相手の文化を知るためには、自国の文化について知っておくことが必要になる。この点については、今回の取り組みにより、初めて気づいた学生も多い(表1)。一般的な受動的な学習では、このような気づきは難しい面があると思われる。また、一般的な講義形式の授業は、少ない教員数で多くの学生を一度に教育するという効率面で優れた特色をもっているが、授業のレベルが合わない場合には学習者にとって授業をうけることは、学ぶという行為からの逃避という結果に終わることもあり得る。そのために、同じ講義を受取る学生のレベルが比較的均一であり、目的意識が同じ方向を向いている場合には、適切な授業のレベルの設定により、講義形式の授業が有効に機能することが期待される。しかしながら、一般的な講義形式の授業により、コミュニケーション力の育成を行うことは限界がある。

「学びのコミュニティ」型授業でおこなったコミュニケーションのスタイルを、課外活動においても実現するのが、peer learning である。より少人数で時間をかけてテーマを設けた自由な対話をすることで、お互いの親密度を高めるという効果を持っている。このような場において、コミュニケーションを楽しみながら、共に学ぶ場としてのコミュニティを実現することが、異文化理解や言語のスキルアップなどに対して、どのような効果があるのかを調べていくことが、今後の課題である。

3.3 留学生参加の「学びのコミュニティ」における地域社会人の役割

グローバル化社会に向けた対応は、新しい地域社会の創生とも深い関わりを持っている。海外からの留学生も、これからの時代にふさわしい地域社会を築くことに関わっていく。そのような中で、社会人として生涯学習にも取り組んでいくことに

なろう。海外からの大学生は、このようにして日本の大学生と共通の話題について、語り合うことが出来るはずである。地域社会人は、グローバル化社会に対応する地域社会のために、国際交流を通じてお互いに学び合う場を創りながら、グローバル化時代に対応した地域社会の創生に貢献することが期待されている。グローバル化社会は、これからも進行するために、これに対応できる地球レベルの視野だけではなく、地域社会のレベルにおいても広い視野を持った人材の育成が必要になってくると考えられる。この目的を達成するためには、地域社会のグローバル化に対する取組が必要になってくる。グローバル化に対する地域社会の知的基盤に関わる生涯教育の充実のためには、地域の大学の果たす役割が重要な意味を持っている。地域社会には、国際的な場において活躍している社会人や、海外での経験が長くその経験を次世代の教育に生かすことを目標としている社会人も多い。地域の大学は、このような状況の中においては、地域の有能な人材を生かす場を設定することにより、グローバル社会に対する地域社会人

の知を次世代に伝える仕組みをつくることが可能になると期待される。

今回の取組は、そのような留学生を交えた学びの中に地域社会人が活躍できる場を、設定することをもう一つの目的としている。社会人は、学生や留学生と共に語り合う中で、国境を越えて若い世代の学生の学びに対しての貢献という次世代の教育に関わることを意識しながら、地域社会の知的基盤の形成に貢献することにつながる。このような目的は、自らが地域社会の発展に寄与するというモチベーションに繋がり、地域の生涯学習環境をつくることにも貢献出来る。このようにして、地域の社会人は、学生や教員と共に学び合うなかで、国境を越えた学生同士の主体的な学びにふさわしい環境を構築することを目指して活動をおこなう。このような場において活躍をする社会人に対して、学生は、地域社会人のグローバル化社会に積極的に関わる意見をもった良識のある市民としての活動の後ろ姿を見ることになる。このことは、地域社会人のさらなる勉学に対するモチベーションに繋がり、次第に他の地域社会人を巻き込

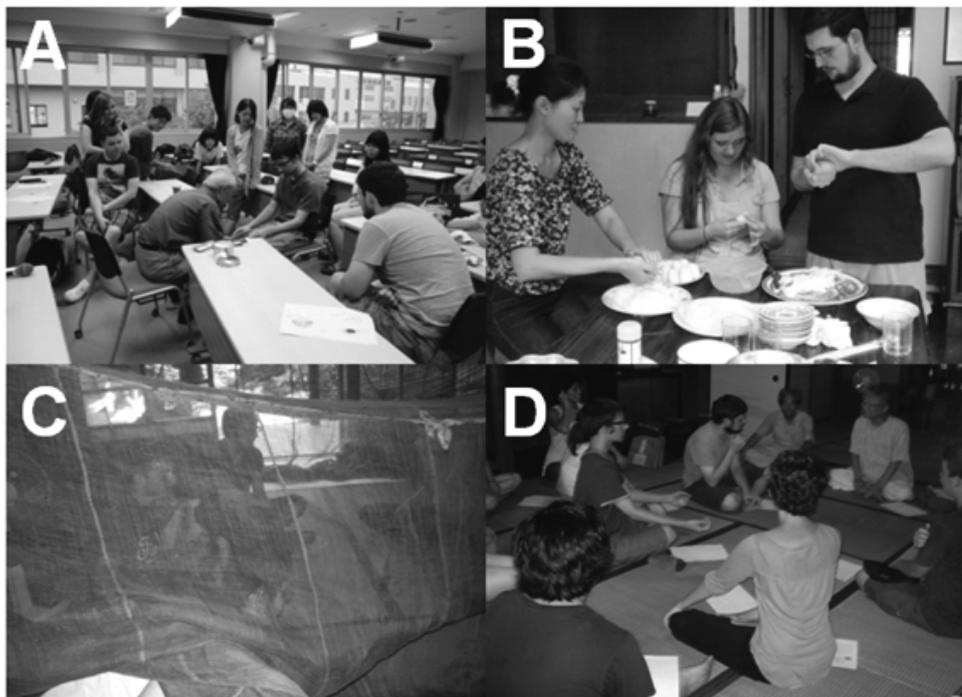


図 4 課外学習における伝統文化体験

- A. 鍼灸医療の体験
- B. 古民家での調理体験
- C. 古民家での蚊帳体験
- D. 古民家でのヨガ講座

表 1 留学生参加の「学びのコミュニティ型授業」の受講生の感想 (一部改変)

私がこの講義で学んだことは、コミュニケーションをとることの難しさです。「会話のキャッチボール」をしなければいけないという先生の言葉が心に残っています。ただ質問して答えてもらって終わりというのではなく、そこから話題を展開していかなければいけないということです。これはコミュニケーションをとるうえでとても大切なことなのではないかと思いました。(総合科学部)

この授業を通して学んだことはもっと世界に目を向けていかなければならないということです。この授業ではアイルランド、中国、モンゴル、韓国、ヴェトナムなど、様々な国の留学生たちとかかわる機会がありました。彼らは自分で日本という外国に行くことを選択し、日本で、日本語はもちろん、文化なども積極的に学んでいます。異国に長いこと滞在することはなかなか簡単なことではなく、とてもすごいことだと思います。私も彼らのようにいつの日かいろんな国を訪れたいです。(総合科学部)

この授業では、異文化交流ということで、アイルランドをはじめ、中国や韓国など様々な国からの留学生たちと交流する機会が多くあり、とても貴重な経験ができたと感じる。授業で交流する度に文化や教育システム、他にもさまざまなことに関し、日本と他国の違いについて新たな知識を得ることができ、勉強になることが非常に多くあった。他の国についてだけでなく、自国についても見直す必要性も痛感した。(医学部栄養学科)

自分が興味ないことや専門にしたいとは思わないことを「専門では無いので…」と逃げていたことを改めて感じた。自分がホリスティック教育の産物となっていたことに気付かされた瞬間で、本で読んだことが直接自分に繋がっていたことにはっと気づかされた。(医学部保健学科)

他の国の文化を知るにはまずは自分の国の文化を知らないといけないなと思った。そして、積極的に外国に行き、実際に目で見て触れることが必要だと思う。普段外国人とはなす機会なんてない。この授業で良い経験ができて本当に良かった。(医学部保健学科)

私はこれまで授業は受け身という感じでしたが、この授業は受け身では成り立たない授業形式でした。正直、初めはこの授業の形式にめんどろさいなあと感じていたし、初対面の人と話すのは少し抵抗がありました。しかし、回数を重ねるうちに同じグループになったことのある人とまた同じグループになったり、授業の形式に慣れたりして、この授業が面白いと思えるようになりました。(医学部保健学科)

日本人なら正しい意見じゃないとなかなか発言しない傾向にある。また今までの授業も学生は先生が話すことを聞くという受け身の立場が多く、討論じたいに慣れていない。私自身もそうだ。留学生の方を見ていてもっと積極性が必要だと感じた。(医学部保健学科)

留学生が言いたいことが分からないといったように自分の英語力のなさを痛感したのはもちろんなのだが、それ以上に日本のことを聞かれた際に答えが分からなかったことが自分としてはショックだった。生まれてからずっと日本で暮らし、ある程度は日本のことを分かったつもりでいた。しかし、留学生に説明できなかったこと、知らなかったことで、自分には案外知らないことの方が多いのではないかと思った。(医学部保健学科)

んで、地域社会に対する影響力を持つようになる。人間性や社会性を身につけながら、個性に応じた学びのスタイルを構築していく。

このようにして地域社会人は、学生と共に学びの場をつくり出すという社会的な活動を行うことを経験しながら、真の学びについて自ら考えることを目指して行く。また、次世代の育成という社会貢献を、学びに対するモチベーションとして生かしていく。このような社会形成に貢献すること自体を目的とする生涯学習の場において、生涯学習に能動的に関わるということに対する重要性が認識され、活力ある超高齢社会に必要な能動的な生涯学習社会の形成につながっていくことが期待される。

3.4 伝統文化を学ぶ意義について

人間の体を理解するうえで、自然の治癒力を考えることが基本的に重要である。科学の進歩はめざましいが、自然治癒力は複雑系に属する現象の一つであり、現在の教育の中に十分には取り入れられていない。これと同じように、重要な現象を教育体系から排除している例として、分野をまたがった学際的な分野があげられる。グローバル化社会などの問題もこのような多分野をまたがった考え方が必要になる。このような多分野横断型の学問は、これからますますその必要性が増してくると思われるが、現代の大学の中ではこのような問題を扱う専門家は極めて少ない。実社会においては、このような多分野横断型の考え方は、伝来の知恵として、社会の中で引き継がれきたと言えよう。このような地域社会の知は、形を変えて世界の中に存在している。地域による違いが、その地域の独自性になっていると思われる。そのために、その地域独自に発展してきた考え方の筋道をたどることで、このような分野横断型の考え方を解き明かすことにつながると考えられる。そのために、縦割り型の大学社会と地域社会が連携して、お互いの不得意な部分を補うことが必要であろう。その観点からも、大学において、伝統社会の知を学ぶ機会を設けることは、意義があると考えられる。今回は、留学生と日本人学生が共に課外学習として、日本の伝統医学を学ぶ機会を合計 5 回設

けた。また、ヨガに関して地域社会で教えている社会人を講師として、課外学習としてヨガ教室を開いた。うだつの町並みとして有名な脇町に、かつて医院であったという伝統家屋が開業されていた当時の状態で保存されている。建物自体は築 300 年にもなるという歴史的な建造物である。この邸宅をお借りして、1 日ヨガ教室を開催した。いまでは、ほとんど使われなくなった蚊帳や「おくどさん」という伝統的なかまどをはじめ、日本の文化を伝える生活用品が多数残されており、日本人にも貴重な機会となった。寒冷なアイルランドに暮らす学生は、蚊帳を初めて見たということで、興味深そうに蚊帳の文化を感じ取ろうとしていた。

3.5 グローバル化社会において必要な教育

グローバル化社会への対応は、大学教育改革の重要な課題となっている。グローバル化社会の到来は、経済的に世界のつながりが際限なく広がっていく可能性をもっている。そのような動きを見せる社会の構造を理解することが、この問題に対処するために必要であろう。このような問題意識をもった参加者が、お互いに議論できる場を設定するというコーディネーター役、異なった立場から意見を述べる参加者などがあって、初めてこのような学びにふさわしい環境が出来上がる。一般的に、マスコミやインターネットからの情報は、一方的に受け身になりがちである。また、ものの考え方の基礎を養うには、不十分な面が多い。様々な国や地域からの留学生や日本人学生は、地域社会人と共に、グローバル化社会に対応するための異文化コミュニケーションを体験することで、新たな学びを得ることが期待出来る。そのために必要なことは、このような問題意識をあらかじめ共有出来ているかである。そのために、課外学習の充実が、当面の課題である。これまでのように文系・理系の枠組みに捕らわれることなく、物事を総合的に考える必要がある。グローバル化社会の問題は、環境問題、持続可能な社会、地域社会など文系・理系の枠組みでは捉えきれない社会問題に関係している。自分の専門分野でないのというような言い訳は、大学教育ではふさわしくな

いだろう。様々な立場、考え方の違いを乗り越えて対話をする事が出来る能力が、次の時代を担う人材育成に欠かすことが出来ない。言語や年代の壁も乗り越えたという経験が、次の時代の地域社会を形作るのではないだろうか。

4. まとめ

今年からスタートした総合科学部のサマースクールでは、多くの全学共通教育の学生がかかわった。今回のプログラムでは、留学生が主に全学共通教育の授業に参加したために、結果として初年次の学生が留学生に関わるが多くなった。一部の総合科学部の授業にも留学生が参加したが、その回数や参加人数などに制約があったために、関わる学生数が限定的であった。また、2012 International Student Conference AWA を全学共通教育の FD 活動と位置付けて、その一部を工学部とのジョイントプログラムとしたことで、一連の企画に関わる教員数もある程度確保することができた。留学生の質と量も、当初の予測を上回る規模で集めることができた。しかしながら日本人学生の参加は、全学共通教育の受講生の一部にとどまった。知名度の問題や、開催時期の問題で、学生の参加者数がそれほど多くなかったのではないかと思われる。

今回のプログラムは、留学生が最長 2 ヶ月間滞在するというサマープログラムとしては、長期間のものであったために、留学生と日本人学生の絆を深めるには効果的であった。このような絆は、学生のボランティアがホームステイとして留学生を受け入れたことによる効果も大きいと思われる。ただし、ホームステイ提供先が限られるために、このようなプログラムを安定的に行うには、ホームステイを含めた留学生の受け入れ体制の整備を全学的におこなう必要があると考えられる。

謝辞

今回のサマープログラムの実施において、お世話になった米国パサディーナ市立大学住友講師、徳島大学全学共通教育米原晶子講師、大学開放実践センター吉田博助教ならびに、地域の社会人の方々に感謝します。

参考文献

- 1) 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・Steve T. Fukuda・齊藤隆仁・菊池 淳・香川順子・廣渡修一: 大学教育改革と教養教育——地域社会人活用による知の循環型社会構築に向けて, 大学教育研究ジャーナル, 6, 88-97, 2009.
- 2) 大橋 眞: 生涯学習と大学教育の融合から生まれる知の循環型社会構築——持続可能な社会に向けた地域の大学の課題, 日本生涯教育学会年報, 32, 227-244, 2011.
- 3) 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・齊藤隆仁: 世代間交流による生涯学習——大学教養教育における対話型学習, 日本生涯教育学会論, 33, 133-141, 2012.
- 4) 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・齊藤隆仁・廣渡修一: 大学教育ボランティアを活用した教養教育——地域に知の循環型社会の構築を目指す新しい形の生涯学習, 日本生涯教育学会年報, 31, 83-96, 2010.
- 5) 鄭 愛軍・大橋 眞: 実例による異文化コミュニケーションの問題分析——青島理工大学と徳島大学とのインターネット交流を中心に, 大学教育研究ジャーナル, 8, 69-75, 2011.
- 6) 鄭 愛軍・大橋 眞: 青島理工大学と徳島大学との遠距離ビデオ会議 (SKYPE) 交流の実例分析: 2011 年 4 月から 7 月までの交流内容を中心に, 大学教育研究ジャーナル, 9, 74-80, 2012.
- 7) 大橋 眞・光永雅子・中恵真理子・Steve T. FUKUDA・齊藤隆仁: 高等教育と生涯教育を考える International Conference——地域社会人を活用した教養教育の一環としての日韓中交流, 大学教育研究ジャーナル, 7, 78-84, 2010.
- 8) 大橋 眞・光永雅子・佐藤高則・齊藤隆仁: 日本とモンゴルの大学教育改革を考える国際会議「International Conference on Global Trends in Educational Culture」の成果と課題, 大学教育研究ジャーナル, 8, 82-90, 2011.
- 9) 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・齊藤隆仁: 地域社会人, 学生, 教員でつくる学びのコミュニティから創出される新たな視点, 日本生涯教育学会論集, 32, 3-12, 2011.